

- ・ フィンガーガイドにより、視覚に障がいのある人の触知を可能に
- ・ 両手で触ることができる新たなインターフェイスデザイン
- ・ 一般の案内図と同じ平面図を用い、かつ同じ場所に設置することで分け隔てないデザインを実現
- ・ 国立民族学博物館、九州大学、山口大学との共同プロジェクト
- ・ 2020年度グッドデザイン賞に続いての受賞

デジタル触地図（国立民族学博物館触知案内板）が

「IAUD 国際デザイン賞 2020 銀賞（公共空間デザイン部門）」を受賞しました

#### 【趣旨説明】

国立民族学博物館のデジタル触地図（国立民族学博物館触知案内板）が、このたびIAUD国際デザイン賞2020（主催：一般財団法人 国際ユニヴァーサルデザイン協議会（IAUD））を受賞しました。

デジタル触地図は、視覚に障がいのある人とない人が、分け隔てなく館内情報にアクセスできるインタラクティブな触地図システムです。タッチパネルディスプレイ上に設置したフィンガーガイドと音声案内との連動によって、館内の位置情報や展示案内を触覚と聴覚から得ることができます。フィンガーガイドは、今回新たに開発された、なぞりながら触る行為を促す新しいインターフェイスデザインです。

また、このデジタル触地図は、国立民族学博物館の文化資源プロジェクトにより開発されました。本プロジェクトのメンバーである九州大学大学院芸術工学研究院の平井 康之教授、山口大学国際総合科学部の富本 浩一郎講師が主導してデザインしました。

すでに本館の展示場に2台設置され活用されており、今後も設置を増やす計画をしております。さらに標準デザイン化を目的として特許を取得し、他の博物館園への公開と普及も目指しております。

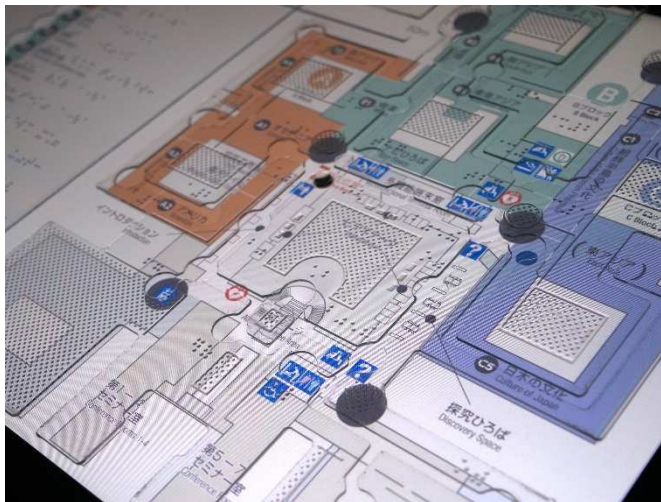


## 【背景】

このデジタル触地図は、国立民族学博物館の「来館者視点からの情報化」をテーマにしたプロジェクトから生まれました。「博物館の触地図は、なぜ一般の案内板と違ったデザインで、場所も離れたところにあるのか？」という素朴な疑問からスタートしました。プロジェクトの最初から視覚に障がいのある人とともに対話を進めた結果、触読に不慣れな人びとが多くいることがわかりました。現状の触地図は有効な経路探索ツールとしてJISやISOによって標準化されています。しかし、厚生労働省による『平成18年身体障害児・者実態調査結果』では、日本の点字の習得率は視覚に障がいのある人全体の十数%とされており、ごく一部の人びとしか使えない現状にあります。社会的にも、2016年4月に障害者差別解消法が施行され、博物館園では、多様な来館者に対する合理的配慮が求められています。デジタル触地図は、視覚に障がいのある人とない人が、ともに楽しむことができるユニバーサルミュージアムの実現を目指しています。

## 【経緯と成果】

国立民族学博物館の文化資源プロジェクトとして、研究スタッフ、デザイン専門家、潜在的来館者である多様な障がいのある人びとがともに考えるインクルーシブデザインによって開発しました。タッチパネルディスプレイの操作は視覚に依存するため、鉄道の線路と駅のように、動線を示す溝と音声ボタンの穴が一筆書きでつながった透明アクリル製のフィンガーガイドを画面上に採用しました。また既設の館内案内のデザインと共通化した、インターフェイスデザインによって、視覚に障がいのある人の「ための」デザインではなく、より多くの人々が「ともに」利用できるデザインを目指しました。設置場所も一般の館内案内図と同じ場所に設置されています。すでに本館展示場に2台設置され活用されています。今後も設置を増やす計画です。さらに標準デザイン化を目的として特許を取得し、他の博物館園への公開と普及も目指しております。



触知案内板拡大

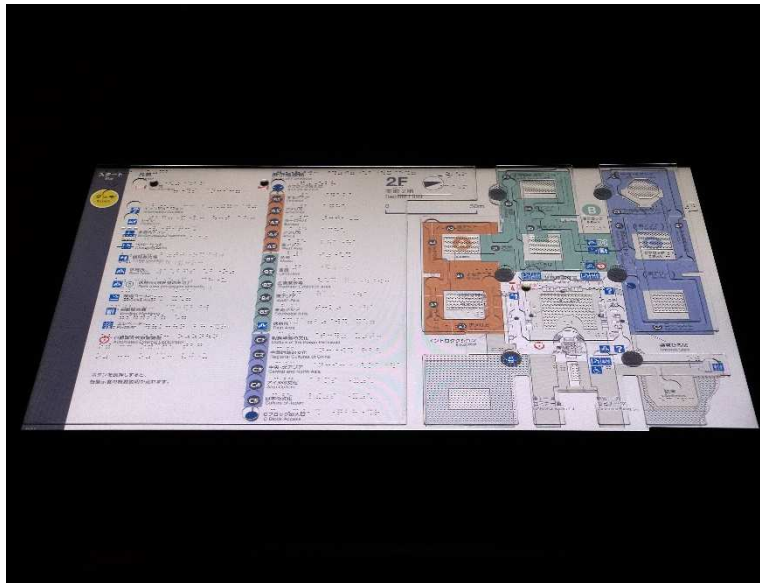
## 【IAUD国際デザイン賞2020審査委員による審査員の視点】

(同法人ホームページより)

通常のタッチスクリーンにある特有の障壁を回避する、よりインクルーシブにデザインされたインタラクティブマップです。日本は他の国と比べて博物館での多感覚体験設備の整備に遅れを取っているため、この優れた努力によって真の一步を踏み出すこととなるでしょう。

【デザイナー（九州大学大学院 芸術工学研究院 教授 平井 康之）からのコメント】

「IAUD国際デザイン賞という世界的な賞を受賞できて大変嬉しく思います。チームの賜物です。このような新しいデザインが社会に定着することを願っています。これまで国立民族学博物館の文化資源プロジェクトで、来館者視点の展示体験のデザインに取り組んできました。プロセスの最初から障がいのある多くの人々と共に考えていくインクルーシブデザインの方法で進めてきました。そして対話の中から、これまでの触地図は点字の読める一部の人にしか使えないことがわかりました。そこで今回のデジタル触地図では、視覚に障がいのある人にもない人にも使いやすい情報提供を目指しました。今後、多様な障がいのある人々が、家で計画を立てるところから、目的とする展示物にたどり着くまで自分で選択できるようにデザインを進めていきたいと考えています。」



【詳細情報】

受賞対象名	デジタル触地図 [国立民族学博物館触知案内板] Digital Tactile Map
受賞企業	国立民族学博物館／九州大学／山口大学 National Museum of Ethnology / Kyushu University / Yamaguchi University
利用開始	2018年3月
設置場所	国立民族学博物館
仕様	【ハードウェア概要】サイズ：約W672.5×D430×H1040 / 構成：タッチパネルディスプレイ（市販品／27インチ／静電容量10点マルチタッチ）、透明アクリルに点字・触知記号を立体的に印刷した触地図、触地図アプリ制御用パソコン（市販品／windows8.1）、筐体（手すり：ステンレス／筐体：メラミン仕上げ） 【ソフトウェア概要】動作環境：windows8.1
プロデューサー	国立民族学博物館 吉田 憲司（よしだ けんじ）
ディレクター	九州大学大学院 芸術工学研究院 教授 平井 康之（ひらい やすゆき）
デザイナー	九州大学大学院 芸術工学研究院 教授 平井 康之 山口大学 国際総合科学部 講師 富本 浩一郎（ふもと こういちろう） 国立民族学博物館 教授 日高 真吾（ひだか しんご） 国立民族学博物館 教授 山中 由里子（やまなか ゆりこ）

## **【IAUD国際デザイン賞とは】（同法人ホームページより）**

一般財団法人 国際ユニヴァーサルデザイン協議会 (IAUD) は、「ユニヴァーサルデザイン (UD) の更なる普及と実現を通して、社会の健全な発展に貢献し、人類全体の福祉向上に寄与すること」を基本理念として活動しています。

IAUDはその活動の一環として、民族、文化、慣習、国籍、性別、年齢、能力等の違いによって、生活に不便さを感じることなく、“一人でも多くの人が快適で暮らしやすい”UD社会の実現に向けて、特に顕著な活動の実践や提案を行なっている団体・個人を表彰する「IAUD国際デザイン賞」を実施しております。

<https://www.iaud.net/award/>